

静波の家

「なんだと、チメ工にそんな口たたけるのかよ!」「少しくらい頭がいいからって、生意氣言うな。なんだ、いい子ぶりやがって!」逆上
した静波は、妹への憎しみを、もはやセーフするほど出来なかつた。止める術もないまま、身に危険を感じた専吉さんは、二〇番
通報した。駆け着けた平塙署員に、専吉さんはゴミ箱の中に捨ててあつた
女物のハンドバッグを差し出した。これは息子がひつたくりで持ち帰つた
ものです。静波の重なる暴力に、専吉さんはもうがまんが出来なかつた。親が息子の処置を
警察の手に委ねたのである——祝福される青春

遠藤允

新声社

重要参考人を逮捕

辻堂の母娘3人強姦事件

静波の家

「なんだか、子メ代にどうなはるのかよ。」少し悔かいながらつて、生糸が言つた。「なんだい、いい子ぶりやうで！」母上
した静波は、妹の言ふ事をもはや受け取ることなく走り去った。
止めて面立ちまじめ、身に余裕をもつて歩く娘の姿。
通勤にて、駅付近の喫茶店で、香吉さんはまたお隠り中をやがる。
女物のコートハサフを差し出した。それを見た娘の顔が、やがて、
ものぞき見の娘の顔に重なる。娘の顔に、香吉さんはもう
うかまいか出でなかた。娘が口子の娘の顔を
見失ひましたわにのあ。

新書社

別件

別件の名前容疑
是女に、のまつた男
お嬢様と、お嬢様
お嬢様と、お嬢様

遠藤允

五一落士·民丁之數計其數之多寡為之多寡。(參見《五國一元四百一〇錢》)

振贊 廣宗五一年五月十日 頒取獎行

重罰 ○一(十二月廿二日) 田地耕者

禁令一五一年五月十一日 田地耕者

禁行所 著者處繫

一九三一年八月十日 頒取獎行

禁行所 著者處繫

(一) 人 · 稅 · 地 · 事 · 款

禁行所

静波の家

（1）

（2）

（3）

（4）

（5）

（6）

（7）

（8）

（9）

（10）

（11）

（12）

（13）

（14）

（15）

（16）

（17）

（18）

（19）

（20）

（21）

（22）

（23）

（24）

（25）

（26）

（27）

（28）

（29）

（30）

（31）

（32）

（33）

（34）

（35）

（36）

（37）

（38）

（39）

（40）

（41）

（42）

（43）

（44）

（45）

（46）

（47）

（48）

（49）

（50）

（51）

（52）

（53）

（54）

（55）

（56）

（57）

（58）

（59）

（60）

（61）

（62）

（63）

（64）

（65）

（66）

（67）

（68）

（69）

（70）

（71）

（72）

（73）

（74）

（75）

（76）

（77）

（78）

（79）

（80）

（81）

（82）

（83）

（84）

（85）

（86）

（87）

（88）

（89）

（90）

（91）

（92）

（93）

（94）

（95）

（96）

（97）

（98）

（99）

（100）

（101）

（102）

（103）

（104）

（105）

（106）

（107）

（108）

（109）

（110）

（111）

（112）

（113）

（114）

（115）

（116）

（117）

（118）

（119）

（120）

（121）

（122）

（123）

（124）

（125）

（126）

（127）

（128）

（129）

（130）

（131）

（132）

（133）

（134）

（135）

（136）

（137）

（138）

（139）

（140）

（141）

（142）

（143）

（144）

（145）

（146）

（147）

（148）

（149）

（150）

（151）

（152）

（153）

（154）

（155）

（156）

（157）

（158）

（159）

（160）

（161）

（162）

（163）

（164）

（165）

（166）

（167）

（168）

（169）

（170）

（171）

（172）

（173）

（174）

（175）

（176）

（177）

（178）

（179）

（180）

（181）

（182）

（183）

（184）

（185）

（186）

（187）

（188）

（189）

（190）

（191）

（192）

（193）

（194）

（195）

（196）

（197）

（198）

（199）

（200）

（201）

（202）

（203）

（204）

（205）

（206）

（207）

（208）

（209）

（210）

（211）

（212）

（213）

（214）

（215）

（216）

（217）

（218）

（219）

（220）

（221）

（222）

（223）

（224）

（225）

（226）

（227）

（228）

（229）

（230）

（231）

（232）

（233）

（234）

（235）

（236）

（237）

（238）

（239）

（240）

（241）

（242）

（243）

（244）

（245）

（246）

（247）

（248）

（249）

（250）

（251）

（252）

（253）

（254）

（255）

（256）

（257）

（258）

（259）

（260）

（261）

（262）

（263）

（264）

（265）

（266）

（267）

（268）

（269）

（270）

（271）

（272）

（273）

（274）

（275）

（276）

（277）

（278）

（279）

（280）

（281）

（282）

（283）

（284）

（285）

（286）

（287）

（288）

（289）

（290）

（291）

（292）

（293）

（294）

（295）

（296）

（297）

（298）

（299）

（300）

（301）

（302）

（303）

（304）

（305）

（306）

（307）

（308）

（309）

（310）

（311）

（312）

（313）

（314）

（315）

（316）

（317）

（318）

（319）

（320）

（321）

（322）

（323）

（324）

（325）

（326）

（327）

（328）

（329）

（330）

装帧
杉浦康平
铃木一誌

「静波の家」

目

次

目 次

歪んだ復讐

一瞬の凶行に絶命…… 9

執拗な電話と訪問…… 35

事情聴取は二千人…… 56

口封じに共犯殺害…… 83

裁きの庭

調べでは全面自供…… 113

黙秘権行使の公判…… 135

はみだして二十一歳

御殿をたてたい…… 169

愛の配分薄く……	186
引き取り拒否……	201
祝福されざる青春……	216
他人の眼……	232
束の間のラブストーリー……	242
母子の休戦協定……	247
愛情飢餓……	256
あとがきに代えて……	264

歪んだ復讐



一瞬の凶行に絶命

——ぼくのことをわすれないでほしい

中学の卒業記念文集に載せるクラスの寄せ書きに、男はそう書いた。十五文字は波打つていて。すでに書き終わつた同級生のメッセージの間に、遠慮するような格好で平仮名が埋め込まれた。

ロツキード事件が噴き出た昭和五十一年春、男は中学を卒業するとすぐ、学校の紹介で自宅に近い自動車部品工場に就職した。しかし、わずか三ヶ月で辞めてしまう。その後、男は定職に就くことがなかつた。

成人するまでの間、男は三ヵ所の少年院に入つていた。十八歳から二十歳までの、三回の誕生日は、いずれも少年院で迎えている。在院期間は通算で二年三ヶ月に及ぶ。正確には、成人してもなお、少年院を出ることが許されなかつた。異例の扱いの部類に入る。

ようやく退院がかなつた日、新聞やテレビは、タフガイ石原裕次郎の胸部動脈瘤の手術成功を、派手に取り上げていた。昭和五十六年五月八日である。

ちょうど一年後の五十七年五月八日夜、二十一歳になつていた男は、神奈川県藤沢市^{ふじさわ}の会社

員宅を訪れた。半年前に知り合つた高校生の長女に思いを寄せ、交際を続けたい一心から、「貸した金を返せ」と要求していたが、この日ばかりは、度重なるしつこさに音をあげた会社員一家に一一〇番通報される。

ほうほうの体で逃げ出した男の胸に、「一家皆殺し」の残忍な炎が燃え上がつた。

偶然に出会つた少年院仲間の少年を誘い、凶器を携えて会社員宅に押し入つたのは、十九日後である。

男は、母娘三人を惨殺し、その直後には、共犯の少年をも口封じのため殺す。八カ月前には、別の少年院仲間も殺していた。

中学卒業からのおよそ六年間、同級生たちは、男の存在をほとんど忘れていた。男が「ぼくのことをわすれないでほしい」と望んだにもかかわらず、中学校在学中の印象がまことに薄かつたからである。

五人殺害事件で、はからずも思い出さざるを得なくなつてしまふ。そういうれば、風変わりな名前だつた——と。

藤間 静波——ふじま・せいは、と読む。

名前だけ見れば、実にたおやかである。豊かなイメージさえかきたてられる。
しかし、藤間の行為は恐るべきものだつた。

凶行中、包丁や繩り小刀でめつた突きにしたあと、それらの凶器を遺体に突き立てたまま逃

走した。その手口は、「証拠になるものは身につけない」という、藤間なりの計算高い知恵が働いていたにせよ、検視に立ち会つた捜査員の目をそむけさせた。

三件の犯行の中でも、とりわけ藤沢市の母娘三人殺害事件は、被害者が犯罪とは無関係の平和な生活を送つていただけに、一家を知る人たちを、悲しみのどん底に突き落とした。静かな住宅街で引き起こされた惨劇は、残忍そのものだった。

昭和五十七年五月二十七日夜――

平年より三度高かつた昼間の気温は、夜に入つても急激に下がることなく、確実に夏が近いことを感じさせた。

藤沢市辻堂神台二ノ七ノ三の会社員畠光治さん(四六)方では、妻の晴子さん(四五)、長女の真輝子さん(一六)、次女の真理子さん(一三)が、遅めの夕食をとろうとしていた。光治さんは、残業のため、まだ帰宅していない。

畠さんは、国鉄辻堂駅から北へ一キロの国道1号近くにある。西側には生コン会社や製鋼会社のグラウンドなどがあるが、周辺は一戸建て住宅や会社寮が建ち並ぶ新興住宅地だ。畠さんの家は道路から二軒目の、二階建て住宅である。

光治さんがこの朝七時、会社へ出勤する時には、真輝子さんも真理子さんも、布団の中で眠つていた。

真輝子さんが二年生に在学中の神奈川県立茅ヶ崎高校では、この日から一学期の中間試験が

始まるため、前夜は遅くまで勉強していたようだ。そんな姉の横で、藤沢市立明治中学二年の真理子さんは、テニス部員だったから、クラブ活動の疲れが残っていたのかもしれない。

晴子さんだけが、光治さんを見送った。

「行つてらっしゃい」

いつも通りの笑顔を見せた晴子さんの、それが最後の言葉になってしまった。

その夜、九畳の洋間の食卓に、こんがり焼けたアジの開きやワカメ入りの味噌汁が並べられ、ピアノの横に置いてあるテレビを見ながらの食事が始まろうとしていた。晴子さんは、テレビの画面が見にくい位置の椅子に腰をおろし、真輝子さんと真理子さんが反対側に並んで座った。玄関に近いほうが真輝子さんだった。

真輝子さんが、ご飯をほんの一口食べた時だった。玄関のチャイムが鳴り響いた。箸を置いた晴子さんと真理子さんが玄関へ出た。真輝子さんは、テレビのチャンネルをフジテレビの「スタービックリ~~秘~~報告」に換えようと立ち上がった。

「新聞屋ですけど」

玄関の外側から聞こえてくる声に、誰にも覚えはなかつた。が、晴子さんは玄関のドアを開けるため、三和土^{たなづ}におりた。居間にいる真輝子さんにも、何らの疑いもわからなかつた。

偶然とはいえ、この日の昼すぎに、正真正銘の新聞集金人が、畠さん方を訪れていたのである。家にいたのは、中間テスト初日の英語と世界史を無事終えて帰宅していた真輝子さん一人

だつた。

「母がいないので、また来て下さい」

若い集金人に、この時、真輝子さんはそう答えた。パートの仕事を終えて午後四時過ぎに帰宅した晴子さんは、真輝子さんから新聞の集金人が来たことを聞いていたはずだ。改めて出直して来たのだと考えたとしても、無理はない。

玄関の外に、殺意を秘めた二人の男が立っているなどとは夢にも思えず、晴子さんは何のためらいもなくチエーンを外し、ドアを内側から押し開いた。

間髪を入れず、男たちが飛び込んで来る。

二番目の男を見て、晴子さんは息をのんだ。

真輝子さんにつきまとい、二十日近く前の五月八日夜にも押しかけて来て、光治さんが一〇番しているうちに姿を消した男が、目をぎらつかせて身構えていたのである。

手袋をはめた右手には、包丁が光っていた。

晴子さんが立ちすくむ一瞬の間に、初めて顔を見る体格のよい男が、素早くチエーンをかけ、電話線を切断した。

晴子さんと真理子さんは、悲鳴をあげながら、凶刃から逃れようと奥に走った。土足で駆け上がった二人の男……。

「このヤロー、バカにしやがって」

男は怒鳴りながら包丁を振りかざし、目の前にいる真理子さんに襲いかかつた。次に、台所

に逃げ込んだ晴子さん、さらに台所と居間の境に茫然と立ち尽くしている真輝子さん——と、男の凶刃は執拗に振りおろされた。

周到な準備と、刺突訓練まで重ねた屈強の若い男を前にして、母娘三人は抵抗する間もなく、逃げることもかなわないまま、背中や胸などをめつた刺しにされ、息絶えた。

真輝子さん、真理子さんとも、心臓に達する深傷が致命傷となり、ほとんど即死状態だったが、真輝子さんの傷が全部で七カ所なのに、真理子さんのそれは二十カ所近くにも及んだ。

晴子さんだけが、からうじて台所のドアを開けて外まで這つて出たが、気づいて追いすがる藤間に繰り小刀を突き立てられた。息絶える直前、しきりに真輝子さんの名を呼んだ。

凶行を終えた二人の男は、玄関から逃走した。

この間、わずかに数分か長くて五分。凶行中に真輝子さんらが叫んだ「キヤー」という悲鳴、晴子さんが「奥さん、奥さん」と呼びかける声などが、近所の人たちの耳に届いている。

それやら、解剖結果などを総合すると、東京・後楽園球場で行われたプロ野球の巨人・中日戦六回表、中日の大島康徳外野手が2ランホームランを放つて七点目を挙げたころ、つまり午後八時前後が凶行時間と推定される。

ちょうどそのころ、光治さんは会社のある厚木市から平塚市内の相模川河川敷にあるゴルフ練習場へ向け、伊勢原市を経由してマイカーで走っていた。二時間の残業を終えてからの、予定の行動だった。三日後の日曜に、社内の親善ゴルフ大会が控えていたため、体を慣らしてお